

第1回 研究会

コロナ後の海外ロングステイの展望



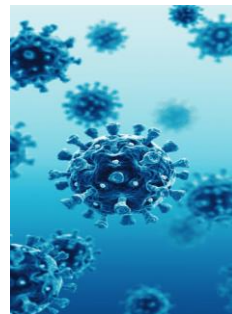
日時：9月3日（土） 10：00～11：00

発表者 弓野克彦
山田美鈴

はじめに

2019年に中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症は、その後瞬く間に世界に拡大し、各国の国境閉鎖や移動制限、煩雑な検疫制度、また、旅行者の感染に対する恐怖心などから航空需要、とりわけ海外旅行・海外ビジネス需要は著しく低迷し、世界の観光産業やロングステイ市場は大きな打撃を被った。

コロナ感染拡大から3年目を迎え、ロングステイ市場が今後、どのような変化を遂げるのかを探るのが本日のテーマである。



本日の内容

I. 新型コロナの感染概況

- ・新型コロナの観光産業に与えた影響
- ・新型コロナと入国制限について
- ・新型コロナとロングステイ市場

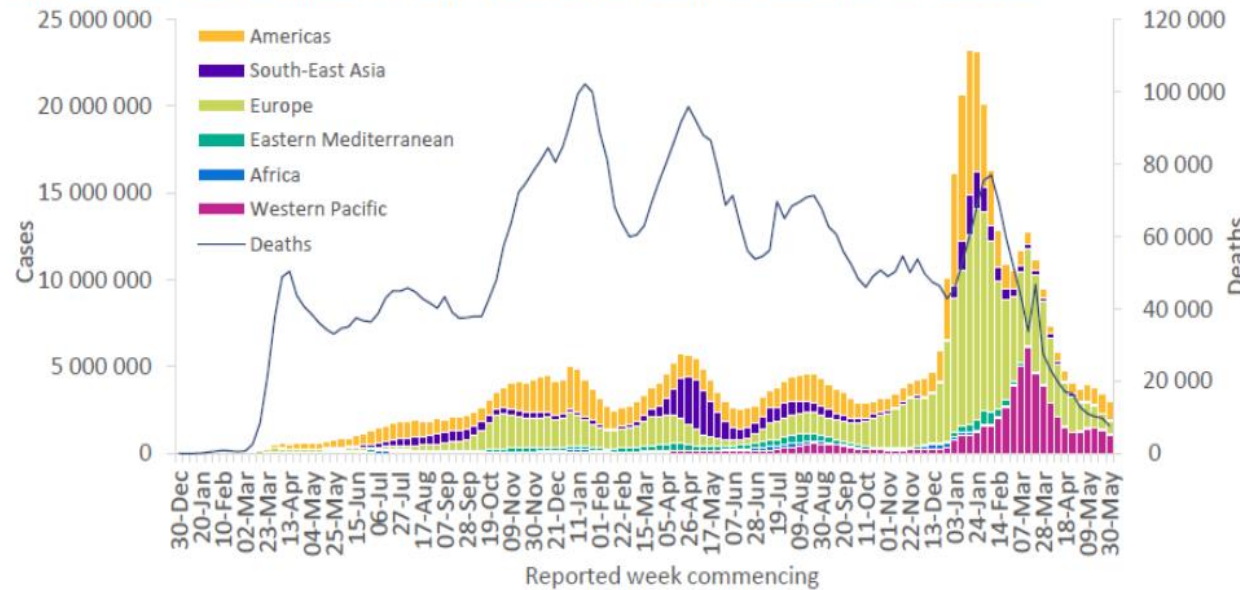
II. 今後のロングステイ市場についてのアンケート調査から

III. ロングステイの今後の展望

■ 新型コロナの感染概況

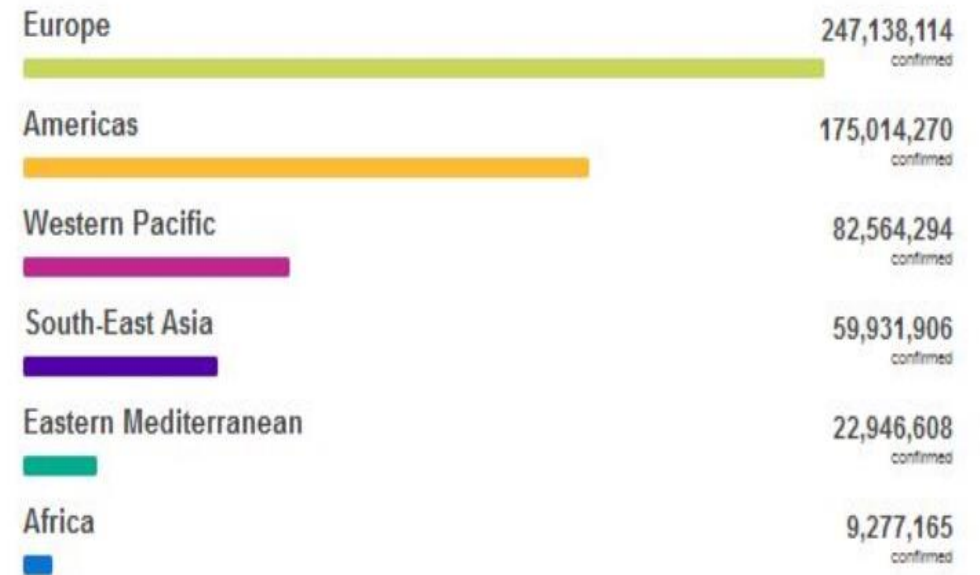
- ・全世界の**累積感染者数は6.0億人**、**累積死亡者数は649万人**（2022年8月）
- ・累計感染者が多い地域： 欧州、北米地区、西太平洋（中国含む）、東南アジア
- ・新規感染者数が多い上位5カ国： 米国、中国、オーストラリア、ブラジル、ドイツ、

Figure 1. COVID-19 cases reported weekly by WHO Region, and global deaths, as of 5 June 2022**



**See [Annex 1: Data, table, and figure notes](#)

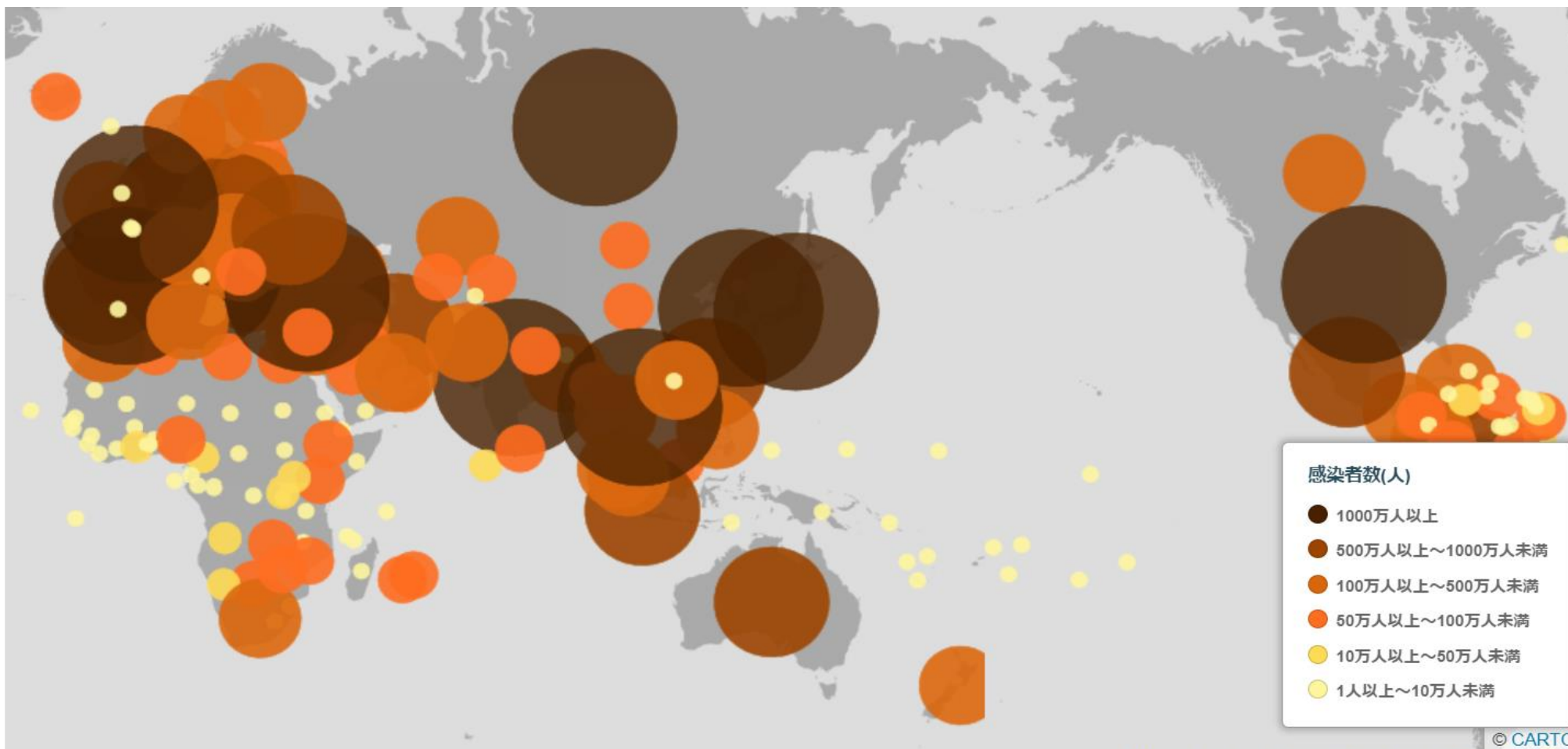
Situation by WHO Region



出典：WHOレポート

■ 新型コロナの感染概況 ②

● 世界の地域別累計感染者数 (人気ロングステイ先は感染数上位地域に存在する)



※米 ジョンス・ホプキンス大学の発表をもとに作成

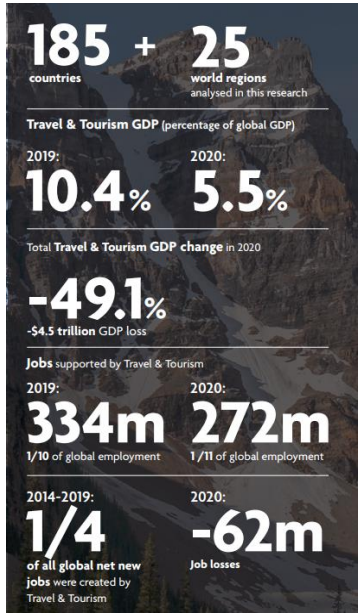
■ 新型コロナの感染概況 ③

コロナ感染症が観光産業に与えた影響

【2020年のコロナの影響】

- 世界全体の雇用の消失 約1億9千万人
- 世界のGDP 約550兆円の損失
- 世界観光GDP総額 10.4% ⇒ **5.5%**
(4.5兆ドル減 対前年49%減)
- 観光関連就業者数 3.3億人 ⇒ 2.7億人

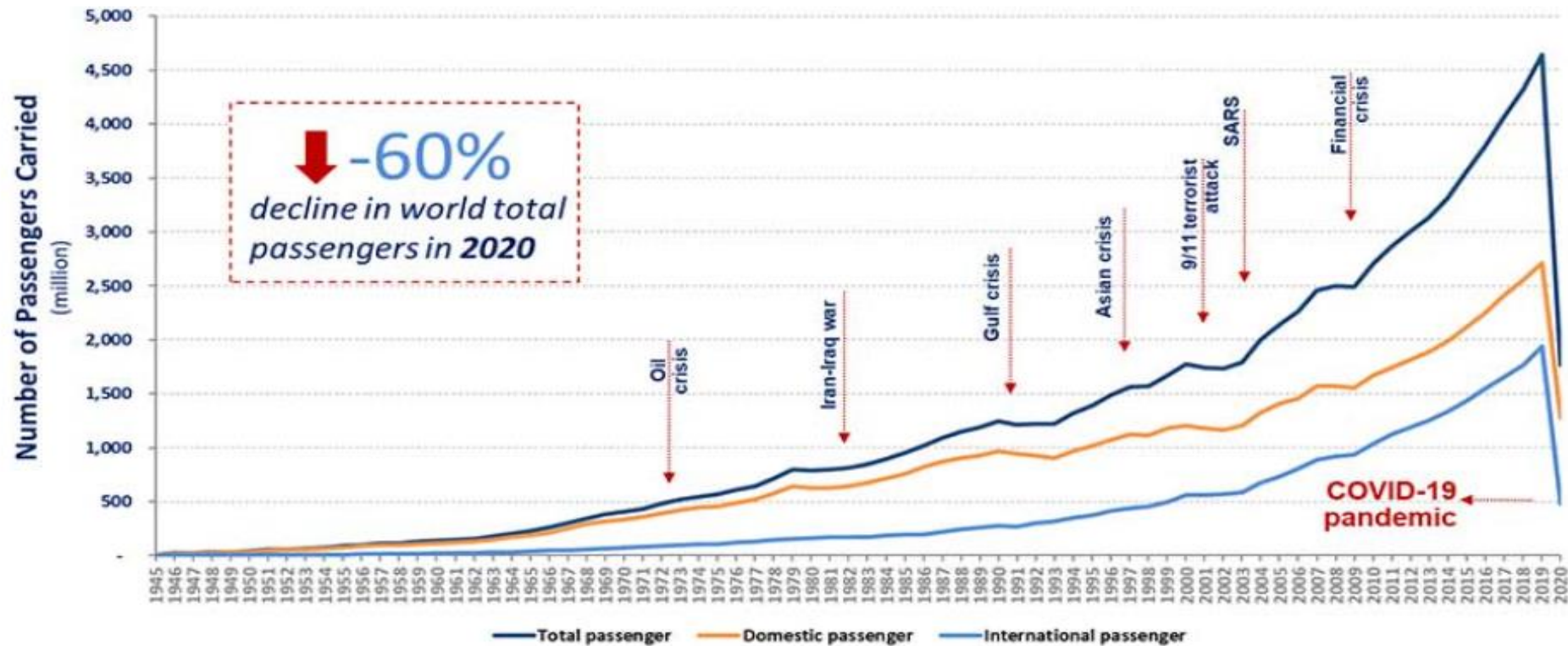
【参考】世界の航空会社の損失 航空旅客数は60%減の18億人へ
約12兆円の赤字⇒ 潜在的損失は40兆円



【参考】

2020年：世界の航空旅客数の推移

国際民間航空機関（Int'l Civil Aviation Organization：ICAO）によると、**2020年の世界全体の年間航空旅客数は前年比60%減の18億人に減少。**



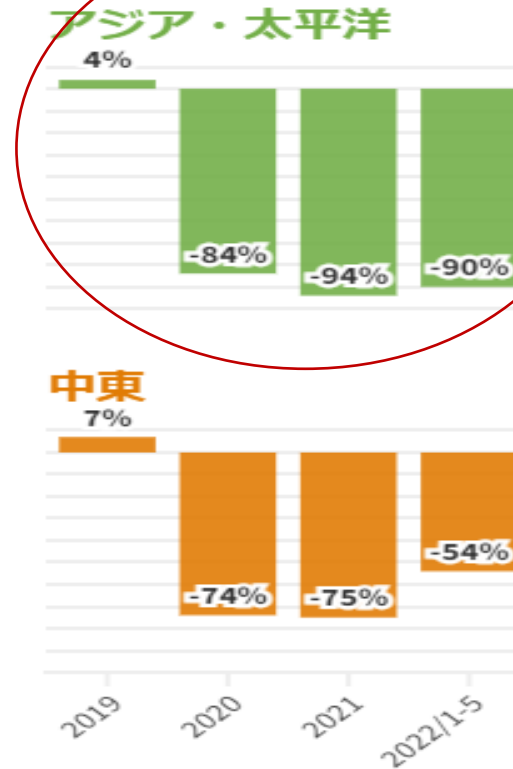
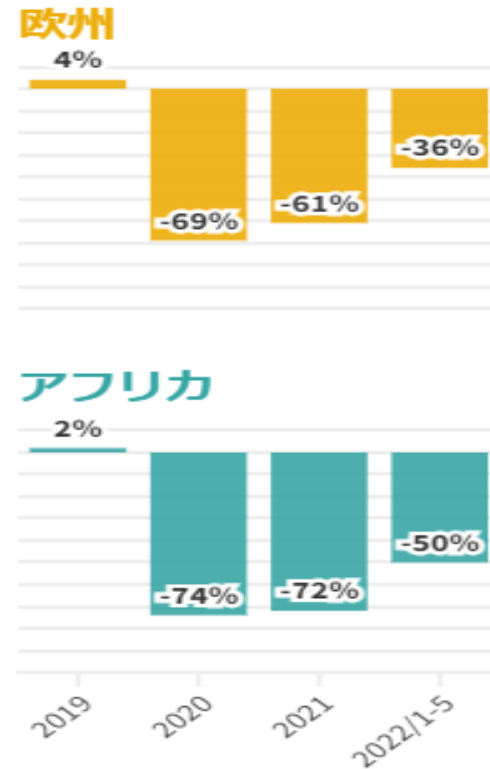
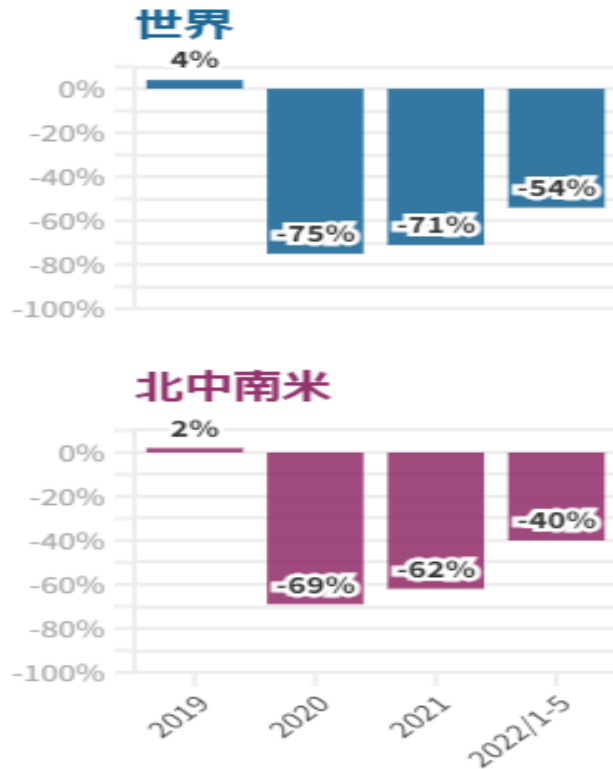
■ 新型コロナの感染概況 ④

コロナ感染症が観光産業に与えた影響

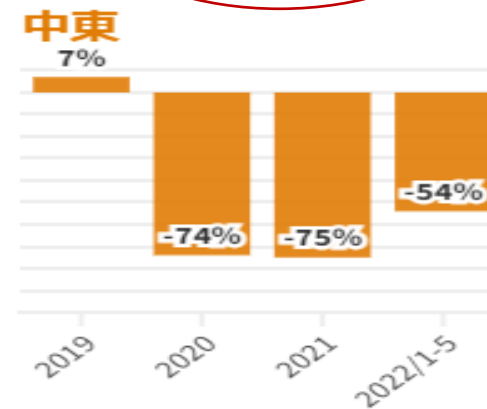
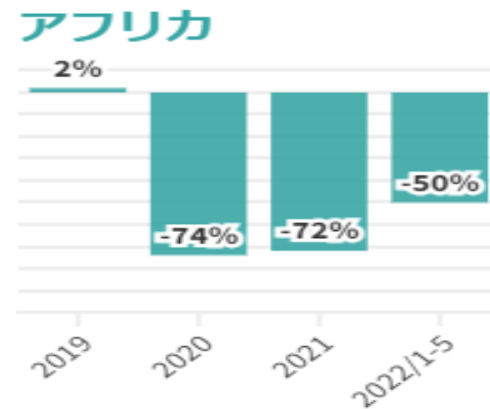
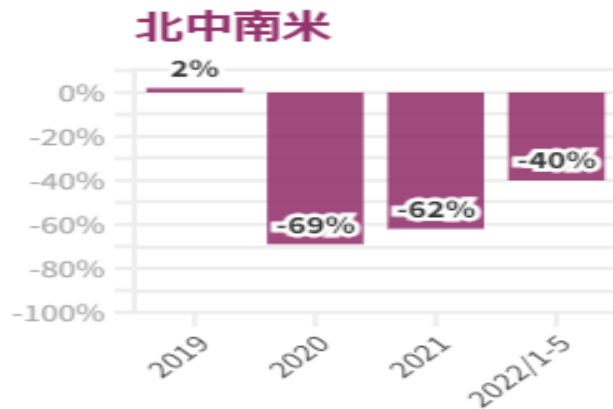
国際観光旅客数の変化の推移

(2019年は前年比、それ以降は2019年比)

すべて 世界 欧州 アジア・太平洋 北中南米 アフリカ 中東



アジア・太平洋
地区のみ回復が
遅れている



■ 新型コロナの感染概況 ⑤

● 新型コロナと入国制限

～入国制限に至るまでの取り組み経緯～

● 各国の感染防止対策への取り組み

【目的】航空を安全に再開するためのロードマップ

2020年5月

1. 旅行前：旅行者の接触履歴の把握
2. 出発空港：体温測定、ソーシャルディスタンス、マスクの着用
3. 到着空港：入国・税関審査の簡素化、受託手荷物受取時間の短縮

2020年6月

1. 14日間ルールでは旅行需要を喚起できないことから、出発前で陰性を確認し、到着時に陰性証明を提出ルールへ

■ 新型コロナの感染概況 ⑥

● 感染コロナと入国制限 ～入国制限に至る経緯～

● 各国の感染防止対策への取り組み

・2020年11月 (ICAO推奨の入国制限措置)

国・地域における新型コロナウイルス感染に関するリスクの判定			
		検査陽性率	
		5%以下	5%超
10万人あたり 新規感染者数	25人以下	Green	Orange
	25人超	Orange	Red
ただし、週間検査実績10万人あたり250件未満		Gray	

リスクに応じた入国時の対応ーリスク・ベスト・アプローチ	
出発国リスク判定	到着国での対応・行動制限
Green	行動制限なし
Orange	行動制限なし、滞在先の申告・検査
Red	行動制限の可能性あり、検査
Gray	

■ 新型コロナの感染概況 ⑦

● 感染コロナと入国制限 ～入国制限に至る経緯～

主要国の主な入国制限措置（2021年以降）

1. 欧州

- ・空港・機内でのマスクの着用義務
- ・ワクチン接種・陰性証明・回復証明の提示義務化
- ・EUデジタルCOVID証明書の提示

2. 米国

- ・新型コロナワクチン接種証明の提示義務化 + 隔離（2021年7月解除）

3. アジア

- ・新型コロナ検査の義務化
- ・入国時のPCR検査の実施（タイは渡航前72時間以内）
- ・入国時の隔離（タイ・ベトナムなど）
- ・陰性証明書の提示

※1個所に長期に滞在し繰り返し往来するロングステイスキームは日本での厳しい入国制限により 多大な影響を及ぼした

2022年から各国は、入国制限緩和へ

【参考】LS海外サロン設置国の最新渡航情報

ロングステイ人気国の東南アジア諸国では、パンデミックコロナ感染拡大により2020年以降、感染対策が始まり外国人に対する厳しい入国制限を実施してきたが、今年に入り**全体的に大きく緩和**されてきている

【アジア・太平洋】

国	観光での入国	入国制限の状況
マレーシア	○	2022年5月からコロナ以前の入国条件を適用。日本人の観光目的の渡航はビザなしで 90日間以内 の滞在は可能
タイ王国	○	2022年6月からワクチン接種状況によらず、全ての渡航者に対して、タイ入国後の 隔離措置が廃止+タイランド・パス廃止
フィリピン	○	2022年2月より、新型コロナワクチン接種を完了した日本の渡航者の 無査証入国 が認められた
インドネシア	○	2022年4月から 特別到着ビザ（VDA）の発給 がジャカルタなど主要空港で可能となった。到着時、空港で申請可能
オーストラリア	○	2022年2月より、新型コロナワクチン接種を完了し、有効な オーストラリアのビザを保有 する全ての渡航者は 渡航規制の免除許可なし で渡航が可能

【参考】LS海外サロン設置国の最新渡航情報

【カナダ】

国	観光での入国	入国規制の状況
アメリカ	○	2022年6月 陰性証明書の提示義務 を撤廃。 <u>ワクチン接種完了証明書</u> の提示のみで入国可
カナダ	○	2022年6月 ワクチン接種義務を廃止

【欧州】

国	観光での入国	入国規制の状況
スイス	○	2022年5月、ワクチン接種証明書不要に「感染懸念国」以外、 入国制限は廃止
オーストリア	○	2022年5月以降、 入国制限は廃止 2022年6月から日本への帰国・入国する方は3回ワクチン接種の有無によらず、入国時検査を実施せず、 入国後の自宅待機は不要
スペイン	○	2022年6月一部緩和、 陰性証明だけでも入国可
マルタ	○	2022年7月、「感染懸念国」以外、 入国制限は廃止

● 海外ロングステイの定義 (ロングステイ財団)

生活の源泉を日本に置きながら海外の1ヶ所に比較的長く滞在し (2週間以上)、
 その国の文化や生活に触れ、現地社会での貢献を通じて国際親善に寄与する
海外滞在型余暇である。

● 海外ロングステイ人気国 Best5

2022.7月末

	コロナ感染者累計	コロナ死亡者
1. マレーシア	4,755,288	36,136
2. タイ	4,634,180	32,027
3. ハワイ (米国全体)	93,634,408	1,041,141
4. フィリピン	3,852,170	61,308
5. 台湾	5,020,895	9,608
【参考】 日本	16,962,177	36,833

● コロナ感染拡大がロングステイ市場に及ぼした影響

① 海外各国並びに日本での**入国制限強化**

⇒ビザ、ワクチン接種証明、隔離など

② 海外ロングステイ地域における感染拡大 (現地での行動制限)

③ 航空会社の大幅減便 (行動の自由の制限)

④ 日本に帰国時の自由の制限 (隔離期間)

⑤ 感染症に対する恐怖心など心理的要因

● コロナ感染拡大が現地ロングステイヤーに及ぼした影響

① 滞在型ロングステイヤーのマイナス面

- ・日常生活面での様々な制約・外出制限
⇒ 買い物、地元の人たちとの交流、レジャー活動の制限
- ・医療面での不安（言葉の問題、医療体制、医療費など）
- ・滞在先周辺国観光の制限
- ・日本との往来の制限など

② 滞在先ロングステイヤーのプラス面

- ・オンライン・インターネット活用による新しい価値創造（ワーケーションの可能性）

Ⅱ. 今後のロングステイ市場についての アンケート調査から

今後のロングステイ市場についてアンケート調査

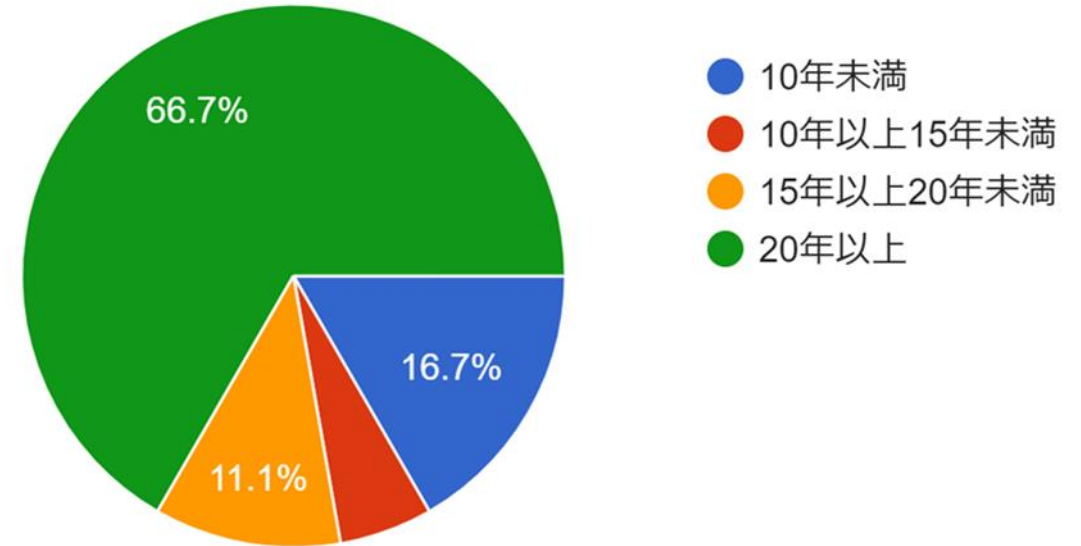
アンケートにご協力いただいた海外サロン一覧

1. インドネシア、バリ
2. オーストラリア、パース
3. オーストリア、ウィーン
4. カナダ、バンクーバー2
5. カナダ、バンフ
6. マレーシア、KL1
7. スイス、グリンデルワールド
8. スペイン、マラガ
9. タイ、バンコク1
10. カナダ、トロント
11. カナダ、バンクーバー1
12. マレーシア、ペナン
13. マルタ共和国
14. マレーシア、KL2
15. マレーシア、KL3
16. マレーシア、イポー
17. 日本（セブサロン代表が石垣島在住）
18. マレーシア、KL4

10か国18サロン

インドネシア	1
フィリピン	1
タイ	1
マレーシア	6
オーストリア	1
スペイン	1
スイス	1
マルタ	1
オーストラリア	1
カナダ	4

回答者の現地での滞在期間



ロングステイ観光学会 研究会 担当：弓野・山田

調査期間：8月9日～8月20日

調査対象：ロングステイ財団 海外サロン

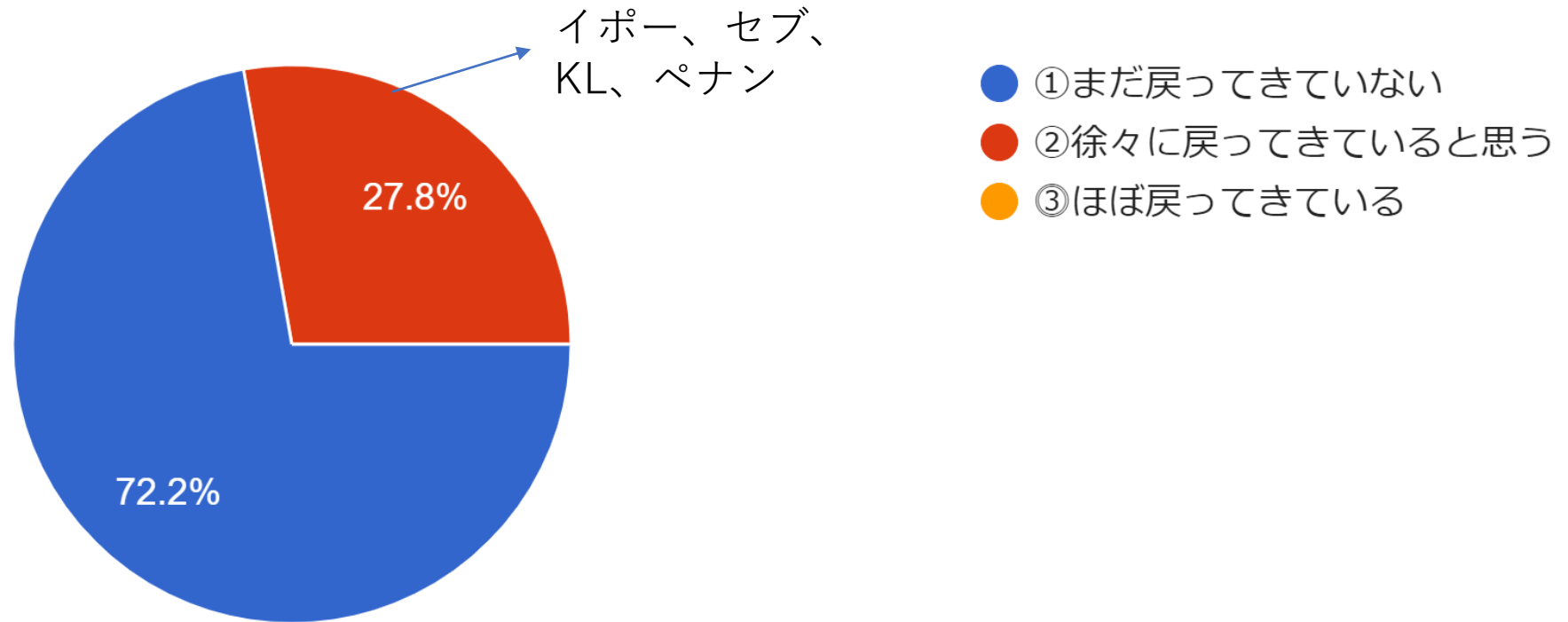
回収 : 18社 (全23か所) 回収率78%

10の質問内容

- 1 滞在されている国、地域名
- 2 何円位滞在していますか
- 3.日本人ロングステイヤーは2019年と比較して現在は戻ってきていると思いますか。該当する回答全てにチェックをいれてください
イ)戻ってきていない ロ)徐々に戻ってきている ハ)ほぼ戻ってきている
- 4.上記の質問に①又は②に回答された方に質問です。ロングステイヤーが2019年レベルに戻るのはいつ頃だと思いますか
イ)2022年の後半 ロ)2023年 ハ)2024年 ニ)元のレベルに戻るのは難しいと思う
- 5.あなたの住んでいる国において、ポストコロナのロングステイの生活様式や方法は大きく変わると思いますか。
イ)特に変わらない ロ)変わると思う ハ)大きく変わる ニ)その他
- 6.上記質問で「大きく変わると思う」と回答された方にお聞きします。何が最も大きく変わると思いますか
- 7.新型コロナという感染症が世界中で長く続いています。今後も一定期間一か所に滞在する旅行スタイル（ロングステイ）は日本人に定着すると思いますか（複数回答）
イ)国内ロングステイは定着する ロ)海外ロングステイは定着する ハ)リモートワークを採用する会社が増えると現役世代にも定着する
ニ)短期観光型から一か所滞在型ロングステイが定着する ホ)どちらともいえない
- 8.ロングステイに必要な滞在情報やサポート提供を今後も継続されますか
イ) 継続希望 ロ) 継続するか迷っている ハ) 旅行者のみをターゲットとしていく予定 ニ) 需要もなかったので継続しない
- 9.コロナ禍での滞在国で直面された最も困った事を差支えのない範囲でご記入ください
- 10.ロングステイ観光学会の存在はご存じでしたか？
[ロングステイ観光学会 \(asjlt.jp\)](http://asjlt.jp)
イ) この質問で初めて知った ロ) 活動に興味がある ハ) 興味はない

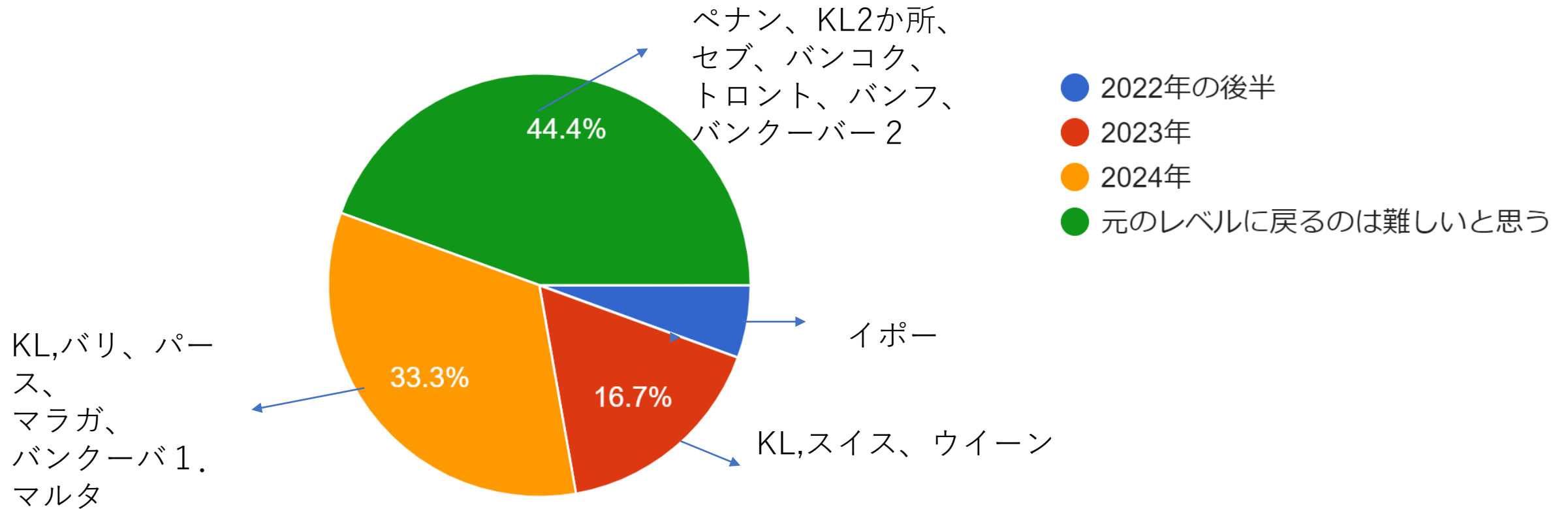
3. 日本人ロングステイヤーは2019年と比較して現在は戻ってきていると思いますか。該当する回答全てにチェックをいれてください。

18件の回答



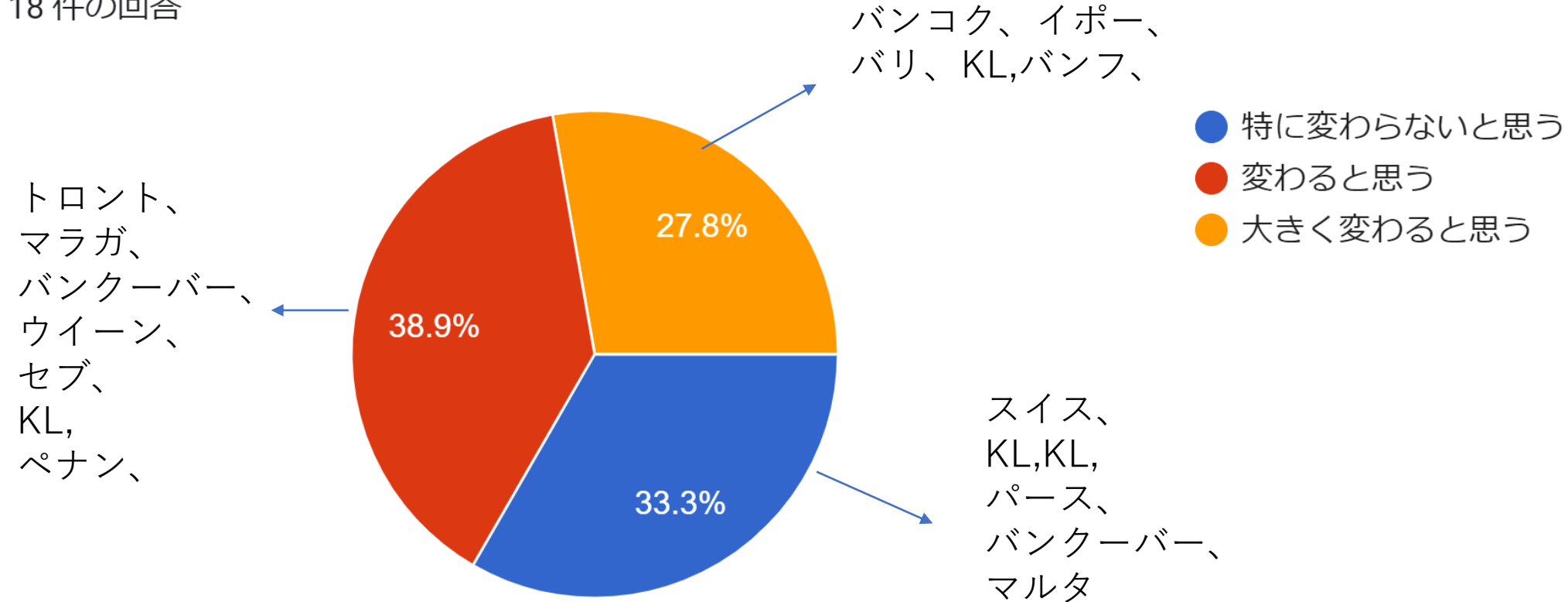
4.上記の質問に①又は②に回答された方に質問です...2019年レベルに戻るのはいつ頃だと思いますか

18件の回答



5.あなたの住んでいる国において、ポストコロナのロングステイの生活様式や方法は大きく変わると思いますか。

18件の回答

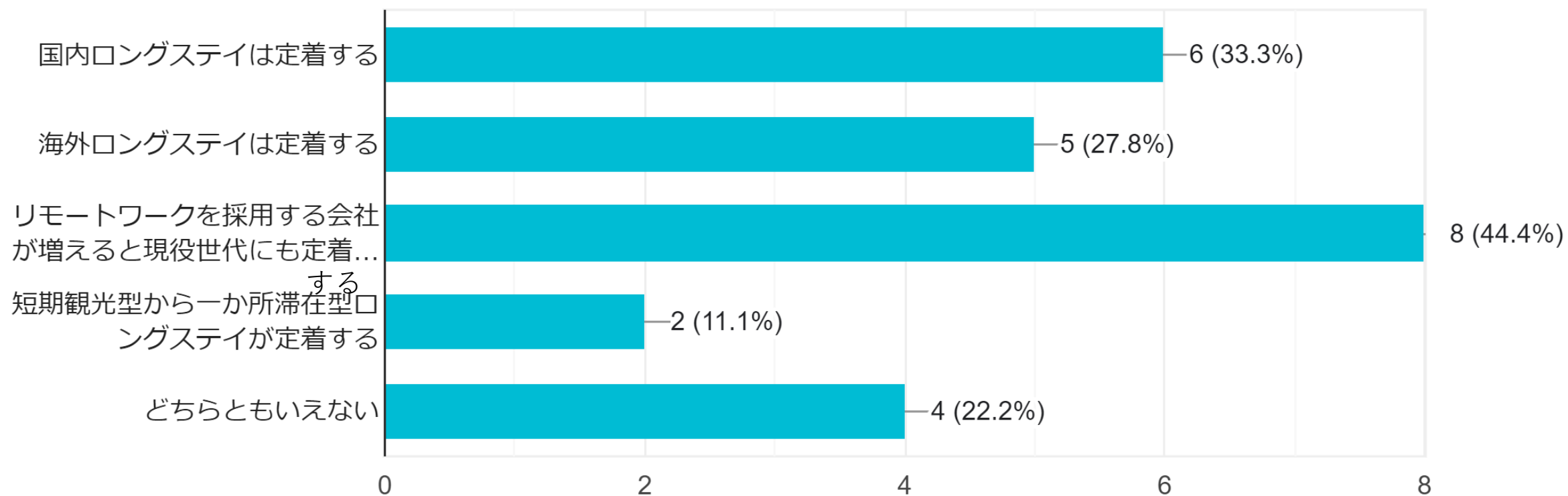


6.上記質問で「大きく変わると思う」と回答された方にお聞きします。何が最も大きく変わると思いますか

- **KL** :わかりません
- **パース** :コスト的に富裕層のみロングステイが可能になっている
- **トロント** :万が一現地で病気になった場合の病院や保険等の心配
- **バンフ** :物価上昇、円安のため、日本円をベースに生活されている方は、生活様式を変えざるを得ない。
- **マラガ** :国のコントロールが様々な側面から強化される
- **ウィーン** :特に大きく変更が発生するとは思いません。
- **マルタ** :特に変わらないと思います
- **バンコク** :円安も進み以前のように物価が安いからという理由で滞在する方がいなくなると思う。富裕層か余程強い理由がある方しかロングステイできなくなるのでは？
- **イポー** :MM2Hの解約者が多くなり、今後は短期滞在する方向で行く形式となる。
- **グリンデルワールド** :そのような回答をしていません。
- **バリ** :現地医療設備の事前確認
- **KL** :MM2Hビザの申請条件変更
- **セブ** :生活水準
- **ペナン** :食事のスタイル
- **KL**:大きく変わるとは思わない

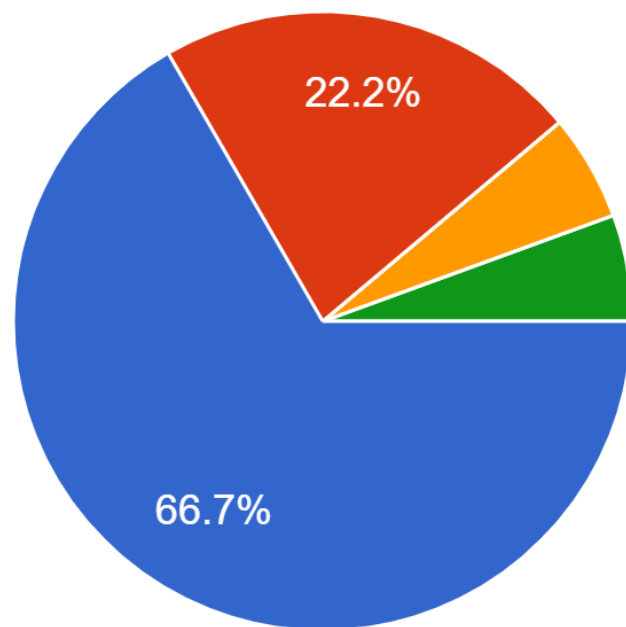
7.新型コロナという感染症が世界中で長く続いて...イ) は日本人に定着すると思いますか (複数回答)

18件の回答



8. ロングステイに必要な滞在情報やサポート提供を今後も継続されますか

18件の回答



- 継続希望
- 継続するか迷っている
- 旅行者のみをターゲットとしていく予定
- 需要もなかったため継続しない

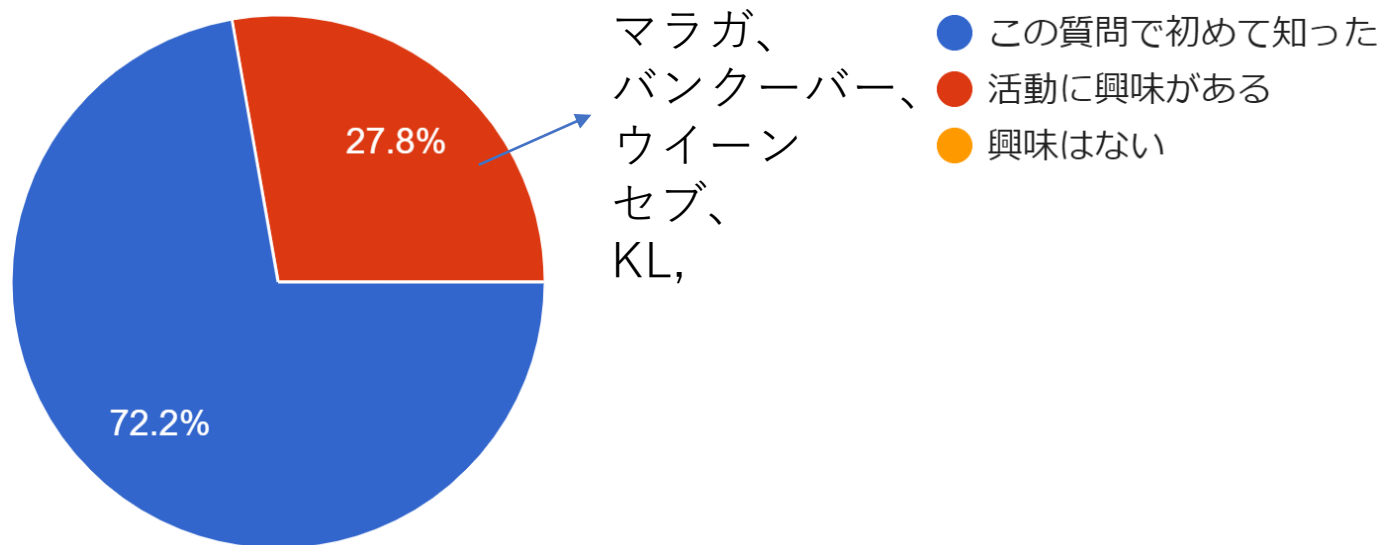
9.コロナ禍での滞在国で直面された最も困った事を差支えのない範囲でご記入ください

- **パース** : 2年半出国できなかった。出国したら帰国できる保証がなかったため
- **マラガ** : 面倒なことは多々ありましたが、仕方がないということで乗り切った感じです。日本に自由に帰れないということも大きな不安でした。
- **バンフ** : スタッフ不足によりサービスの質、量の低下
- **KL** : ロックダウン
- **ペナン** : ロックダウンになった時、移動距離、範囲がしてされたこと
- **KL** : 入出国が厳しく日本に帰れなかったこと
- **KL** : 出入国制限とルール
- **トロント** : 帰国前のPCR検査で陽性となりホテルに隔離された方がいましたが、海外でおひとりで残された時のメンタルケアが必要だと思いました。
- **KL** : 日本に滞在している家族が入院した時、すぐに日本へ帰国できなかった。マレーシアのロックダウンの時に外に外出できなかった
- **グリンデルワールド** : 日本帰国時の問題、MYSOSのインストールなどなど
- **バンコク** : 自分の会社の経営、売り上げ激減下での資金繰り
- **バリ** : 自身、家族への感染防止のため、外出して友人たちと会うことと自粛せざるをえないこと
- **マルタ** : 観光客が激減したこと

特になし 3件

10.ロングステイ観光学会の存在はご存じでしたか？ ロングステイ観光学会 (asjlt.jp)

18件の回答



【ロングステイ市場について】

- ・海外で2020年から起こったパンデミックは、各国の事情、方針によって管理、統制方法が違い、日本人に人気のアジア各国はロックダウンをはじめ厳しい制限が発令された。また、日本への入国制限が厳しくなり、ロングステイ市場は大きな影響を受け、現在も72%の海外サロンがロングステイヤーが戻ってきていないと回答している。
- ・ロングステイ市場の2019年への回帰は、難しいという海外サロンが44%,そして33%の海外サロンが戻っても2024年以降と回答している
- ・そして、ロングステイの**生活様式**も27%の海外サロンが大きく変わるだろうと回答している。

【ロングステイ市場の今後の課題】

- ① 現地の医療体制・事情の事前確認、海外旅行保険、従来カード保険のみが多かったが、コロナ対策用の保険加入が必要となる。
- ② 入国後の感染対策としてアプリ対応の国が多い。携帯電話ガラケーはN G. スマホが必須となる
- ③ 物価高、航空運賃の高騰、円安の影響も大きく、ロングステイ市場は富裕層に限定される可能性が高い。

※ 今後のロングステイについては、リモートワークを採用する会社も増えたことで、現役世代にも定着すると44%の海外サロンが回答している点は注目に値する。

Ⅲ. ロングステイ市場の今後の展望



■ ロングステイの今後の展望

● Beforeコロナのロングステイマーケットの概況

1) 「安・近・暖」が主流

2) ロングステイ滞在型余暇のライフスタイルとは

■ ロングステイの今後の展望

● Beforeコロナのロングステイマーケットの概況

1) . 「安・近・暖」が主流

⇒アジア/太平洋地域の国がTOP10に7カ国ランキング

COVID-19蔓延以前のロングステイしたい国・地域の推移

出所：ロングステイ財団

	1992	2000	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
1	ハワイ	オーストラリア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア	マレーシア
2	カナダ	ハワイ	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	ハワイ	ハワイ	タイ	タイ	タイ	タイ	タイ	タイ	タイ	タイ
3	オーストラリア	ニュージールランド	タイ	タイ	ハワイ	オーストラリア	タイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ	ハワイ
4	アメリカ西海岸	カナダ	ニュージールランド	ハワイ	タイ	タイ	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	オーストラリア	台湾	台湾	フィリピン
5	ニュージールランド	スペイン	ハワイ	ニュージールランド	ニュージールランド	ニュージールランド	カナダ	カナダ	ニュージールランド	ニュージールランド	カナダ	フィリピン	フィリピン	フィリピン	オーストラリア
6	スイス	イギリス	カナダ	カナダ	カナダ	カナダ	ニュージールランド	ニュージールランド	カナダ	フィリピン	ニュージールランド	ニュージールランド	オーストラリア	オーストラリア	台湾
7	イギリス	スイス	スペイン	フィリピン	スペイン	フィリピン	フィリピン	インドネシア	フィリピン	シンガポール	シンガポール	カナダ	カナダ	アメリカ本土	カナダ
8	フランス	イタリア	インドネシア	インドネシア	インドネシア	インドネシア	スペイン	フィリピン	シンガポール	アメリカ本土	アメリカ本土	シンガポール	シンガポール	シンガポール	インドネシア
9	スペイン	アメリカ西海岸	イギリス	スペイン	フィリピン	スペイン	インドネシア	台湾	インドネシア	カナダ	フィリピン	台湾	インドネシア	カナダ	シンガポール
10	アメリカ東海岸	マレーシア	アメリカ本土	アメリカ本土	アメリカ本土	アメリカ本土	スイス	シンガポール	台湾	インドネシア	インドネシア	インドネシア	ニュージールランド	ニュージールランド	アメリカ本土

■ ロングステイの今後の展望

● Beforeコロナのロングステイマーケットの概況

10年間滞在査証 (MM2H)の取得状況 (例：マレーシア)

- ・MM2H査証取得者の推移は2000年以降、順調に伸びていたが、2012年（団塊の世代が65歳到達時）から減少に転じている。2021年から査証取得条件が厳しくなった。
- ・日本人の10年間の滞在査証MM2H取得者数 中国1位（累計12,881人） **日本2位**（同4,778人）

マレーシアMM2H長期ビザ取得者の推移 (2002-2018)

NO.	COUNTRY OF NATIONALITY	YEAR																	TOTAL (2002 - 2018)	SHARE (%)
		2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018		
1	People's Republic of China	241	521	468	502	242	90	120	114	154	405	731	1,337	1,307	719	1,512	2,923	1,495	12,881	30.5
2	Japan	49	99	42	87	157	198	210	189	195	423	816	739	428	300	281	352	233	4,778	11.3
3	People's Republic of Bangladesh	0	32	204	852	341	149	68	86	74	276	388	285	250	205	283	451	191	4,135	9.8
4	United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland	108	159	210	199	209	240	208	162	141	153	139	148	117	83	110	200	105	2,691	6.4
5	Republic of Korea	5	12	66	60	65	151	86	54	49	64	85	98	137	120	184	693	449	2,378	5.6
6	Republic of Singapore	98	143	91	62	94	58	48	61	73	78	83	145	94	67	93	117	56	1,459	3.5
7	Islamic Republic of Iran	0	2	8	7	9	59	227	212	227	286	201	51	17	19	8	43	23	1,399	3.3
8	Taiwan	38	95	140	186	63	31	16	36	49	70	85	151	83	71	77	134	71	1,396	3.3
9	Hong Kong Special Administrative Region, China	17	41	86	56	47	10	6	14	2	15	35	62	44	42	78	339	193	1,087	2.6
10	Republic of India	45	123	118	80	51	46	32	35	51	50	56	41	42	46	68	100	63	1,047	2.5
11	Others	219	418	484	524	451	471	491	635	484	567	608	618	555	539	653	843	460	9,020	21.3
TOTAL		818	1,645	1,917	2,615	1,729	1,503	1,512	1,578	1,499	2,387	3,227	3,675	3,074	2,211	3,347	6,195	3,339	42,271	100.0

■ ロングステイの今後の展望

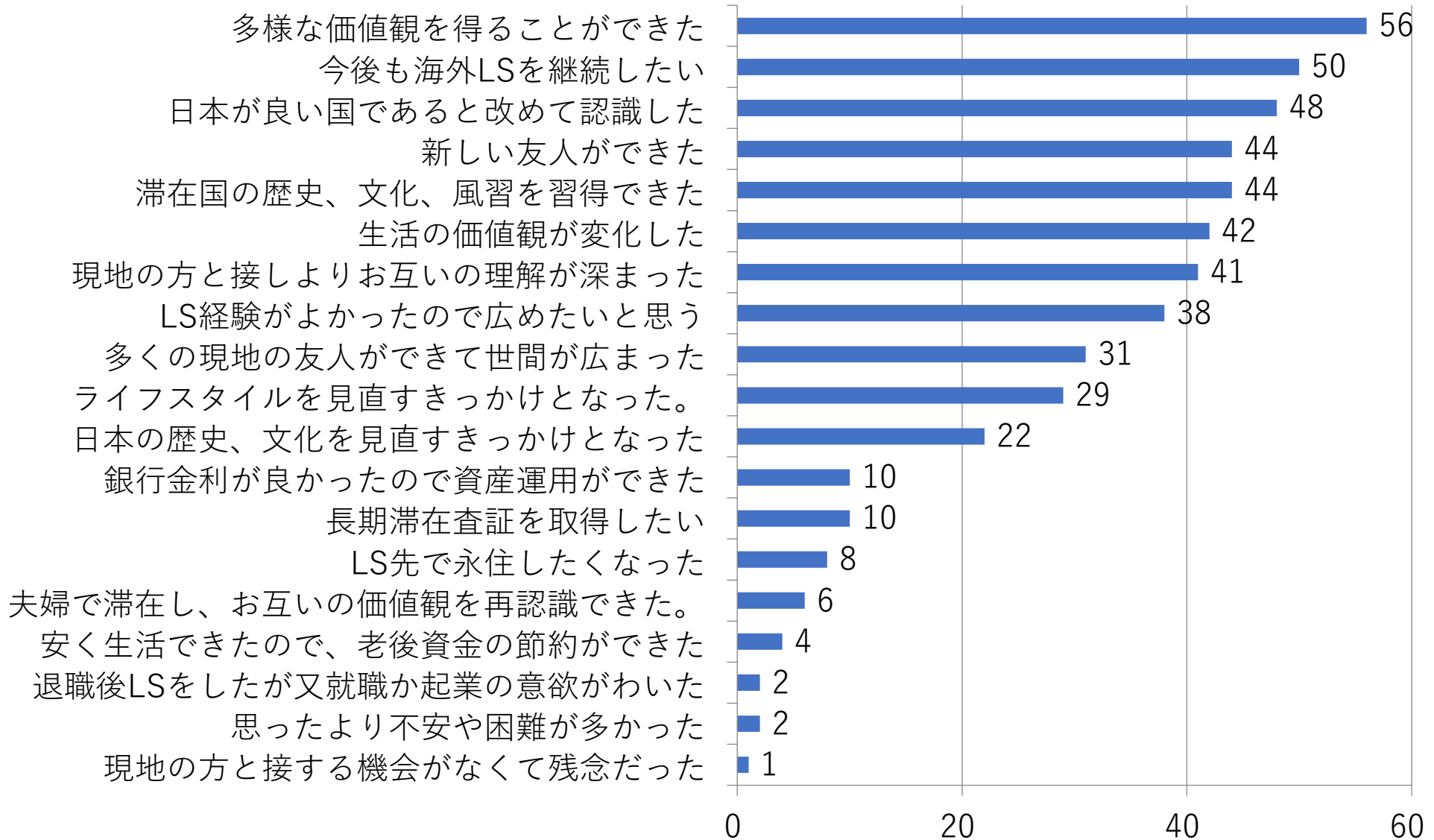
● Beforeコロナのロングステイマーケットの概況

2) ロングステイ滞在型余暇のライフスタイル

- ・現地での人的交流 (趣味・スポーツ・食事会など)
- ・旅行・レジャー (近場や近隣諸国への短期旅行など)
- ・イベントへの参加 (異文化体験など)
- ・知的好奇心の探究 (語学・習い事など)

※ ロングステイヤーは現地での非日常生活を通し、多くの刺激や学びを体験できたと賞賛の声が多い。(2016年アンケート結果より)

【参考】ロングステイを体験した人へのアンケート結果



■ ロングステイの今後の展望

● Afterコロナのロングステイマーケット

1. コロナ感染拡大でロングステイはどう変化したのか？
2. ロングステイのライフスタイルの変化は？

■ ロングステイの今後の展望

■ Afterコロナのロングステイマーケット

1) コロナ感染拡大でロングステイはどう変化したのか？

- コロナ感染拡大による様々な現地での自由行動の制限
 - ⇒滞在型余暇本来の様々な活動に支障が生じた
 - ⇒感染への恐怖から滞在先での生活を余儀なくされた
 - ⇒医療体制への不安（言葉の問題、ワクチン接種など）
 - ⇒買い物の制限
 - ⇒情報収集の課題が暴露（特にコロナ関連情報）
- 近隣諸国への旅行や日本への一時帰国が困難に
 - ⇒海外のある特定地域に滞在しながら様々な地域を訪問するLSスタイルが制限されたことでロングステイヤーのストレス増加

■ ロングステイの今後の展望

● Afterコロナのロングステイマーケット ②

2) ロングステイライフスタイル（生活）の変化

・物価の高騰

⇒欧米だけでなく安かったアジア圏でも生活費が高騰

⇒不動産価格の高騰（投資対象ではなくなる）

・余暇・レジャー費の高騰

・ショッピングスタイルの変化（自由行動の制約）

・国独自の感染対策への対応を余儀なくされた

⇒ストレス増

■ ロングステイの今後の展望

● Afterコロナのロングステイマーケット③

1) 今後のマーケットの予想される変化

① 富裕層によるロングステイへ

⇒円安・物価高騰で海外滞在型の魅力が薄れてきた

② 国内ロングステイへの回帰

⇒今まで海外ロングステイしていたロングステイヤーが日本での長期滞在を目指す可能性 （日本国内の滞在型インフラの整備が前提）

③ 現役世代によるテレワーク型海外ロングステイ

⇒リタイアメント層が中心であった海外ロングステイが、現役世代も可能に

「Longstay with Family」への広がり期待

■ ロングステイの今後の展望

● Afterコロナのロングステイマーケット④

2) ロングステイのライフスタイルはどう変わるのか？

① 安全意識の高揚による生活スタイルの変化

- ・密を避けるアウトドア志向が強まり、都市空間で過ごす時間が減り
グリーンツーリズム、アグリツーリズム、サイクルツーリズムなどへシフトか？
- ・安全を意識した生活スタイルへシフト
⇒インターネットやオンラインの活用による交流会・イベントの開催
- ・医療保険加入による健康と生活の安定

② 節約志向の高揚

■ ロングステイの今後の展望

● 海外ロングステイの今後の課題

① 事前情報の収集

- ・各国のビザ情報、安全情報、コロナ情報など

② 綿密なロングステイ計画の遂行

- ・予算に見合った滞在計画（賃貸物件、期間など）
- ・ロングステイの目的の明確化

③ 安全と健康対策

- ・コロナ対策用の医療保険への加入 / 事前医療情報の収集
- ・携帯電話はガラケーではなくスマホが必須

■ ロングステイの今後の展望（まとめ）

世界的なコロナ感染の拡大は、世界中の日常生活に多大な影響を及ぼした。海外滞在型余暇を目的とするロングステイもその例外ではない。今回、様々な情報に接し考察する限り、ロングステイの行動様式は変わらないものの生活形態や余暇の過ごし方は今後価値を変え、大きく変化すると考えられる。

●新しいロングステイの潮流

今回の調査で見えてきたことは、

- ①海外ロングステイ市場は、シニア層から富裕層へ、又 テレワークを活用した現役層へシフトする可能性が出てきていること
- ②安全とリスク管理がより重視されるようになること
- ③国内ロングステイ市場が今後インバウンドロングステイを含め、大きく成長する市場になること（インフラ整備が前提）

以上

ご清聴ありがとうございました。